ひとみずむ 28　OHKOSHI(50)

★ぼくのひとみずむ

台所へ行き、水をひとくち飲んだ。
リビングでは奥さんがテレビを見ている。
その隣りに寝転がった。

少女が草原を元気いっぱいに走っている。
草原は一面に花が咲いている。
背後には雪を抱いた大きな山々が連なっている。

「これはなに？」
「ハイジだよ！　知らないの？　アルプスの少女ハイジ」

ハイジの暮らすアルプスの山里に、親友のクララが滞在している。
彼女は生まれつき足が不自由だった。
ハイジの祖父がクララの祖母に語りかけている。
「恐らくあの子の足は歩けるようになる。自分の足で歩きたいという気持ち次第じゃ。
あとは山の自然と、彼女を心から応援する友人が、あの子を歩けるようにしてくれるじゃろう」
ある日、牛に驚いたクララは思わず自分の足で立ち上がっていた。
そこから歩く練習が始まった。いつも隣りでハイジが見守っている。
時にはクララの手を取り、時にはその手を放す。
ある日、ついにクララは一人で立ち、ふらふらしながらも数歩を踏み出して
一輪の花を摘んだ。
ハイジは大喜びでクララの周りを駆け回り、野原にひっくり返った。

堀口さんがハイジだろうって？　それじゃ如何にもでしょ。笑

なぜ泣いたのだろう。

2007 年 1 月 27 日「マクドナルドで学んだ 7 つの秘訣セミナー」で
堀口さんに初めてお会いした。
堀口さんのブログのファンだったが、セミナーに行くのは気が重かった。
大半の参加者が女性だろう。女湯の暖簾をくぐるような思いだった。
なに？ この人。なんでいるの？ そう思われそうな気がした。
会場へ入ると、スーツを着た背の高い女性が機材のセッティングをしている。
やべっ！ あれが堀口さんか。溌剌としていて、眩しく感じる。
緊張するなぁ。

セミナーが終わってから、懇親会のため渋谷を公園通りへ向かった。
「セミナーはどうでしたか？」 宮益坂で突然、堀口さんが話し掛けてきた。
慌てた。すぐに感想が出て来ない。ブログいいですね、と言ったのだけ覚えている。

ふと夕暮れの空が目に入り、視界いっぱいに広がった。
大気が澄んでいる。薄いオレンジから淡いピンクの光。
渋谷で空を見上げたのは初めてだ。街の人々は誰もこの美しさに気づいていない。
堀口さんに教えようと思ったが、すでに他の方と話されていたので諦めた。

2 週間後、堀口さんに感想をメールした。

毎日が楽しく濃く充実して過ごせています。
極めつけは奥様からの「変わった」というお言葉。 「鉄の扉が開いた」と言われました。
まとめますと、今まで出た色々なセミナー、読んできた本、ブログ、過去の全ての体験・・仕事や旅行や楽しいこと 悲しいこと・嫌なことなど全て、空の色、朝の匂い、風の肌触り、都会の喧騒、町を歩く人、太陽の陽だまり、水の音、 全てが「つながってきた」と感じています。 自分の中で、何もかもが関係し合い、共鳴し合い、ハーモニーとなり始めている。
あのセミナーと懇親会で、自分の感覚が刺激され開放された気がします。
「敬意」と「信頼」と言う言葉では表し切れない、もっと素晴らしい「伝えるモノ」があの場にありました。
あ、だから「敬意×信頼」って掛け算になっているのですかね?

半日ほどして堀口さんから返信が来た。「嬉し過ぎて涙が出ました」と書いてある。
涙ぁ？　驚いた。なぜ泣いたのだろう。
この感想は堀口さんのブログに掲載された。
いつも読んでいるブログで自分の文章を読んだ。嬉しいとともに恥ずかしかった。

I changed the world around me by changing myself.

2008 年。 重い悩みがあった。
職場の同僚と険悪な関係が続いている。
それを解消するために、いろいろな本を読んだりセミナーへ出たりしていた。
しかし成果は出ていない。彼と出会って 2 年半・・関係は冷え切るばかりだった。

2008 年 5 月 17 日。堀口さんの「天使トークセミナー」に参加した。
「あ、 その緑色のカーディガンいいですね。とてもお似合いです」
会場入りと同時に、堀口さんからこの言葉が飛んできた。

コミュニケーションが上手になりたいと考えていた。相手の反応をとても気にしている。
このセミナーで「上手くやろう」という意識から解放された。
相手がどう思っても構わない。自分は相手にどうしたいのか？　それだけ意識しよう。

さっそく職場の同僚が反応した。彼は凄まじく怒り出した。
「近づくな」ということか・・ 悪意と憎しみをこめた言葉が雨あられと降ってきた。
反撃する気はない。ただ言葉を受け止めていた。不思議と怒りは感じなかった。
しかし先行きは絶望的だ。もう彼とは仕事にならないだろうと感じた。
「いまできるのは、彼を温めてあげることだけだよ」母には、こう語っていた。

それから数日後の明け方。突然、彼の本当の姿が見えた。
自分と同じように体温を持ち、懸命に生きている人間として見えた。
そして温かく優しい気持ちが溢れてきて心を満たし始めた。
静かで穏やかな状態が全身を包んでいる。経験したことの無い不思議な感覚だった。
そのまま外へ出て、自宅近くの川沿いにある祠へ行った。
そしてこの体験を感謝した。

それからも特に接し方を変えたつもりはない。 しかし彼はみるみる変化していった。
ぼくのところまで来て挨拶してくれるようになった。
汚い言葉を使わずに丁寧な言葉づかいになった。ときどき小さく笑うことさえある。
I changed the world around me by changing myself.
これは「ひとみずむ 2」 に出て来る美しいフレーズだが・・こっそり借りちゃえ。

この感動的な話を堀口さんに報告した。きっとまたブログで紹介してくれるだろうと思った。
そしてそうなった。ただ、堀口さんが泣かなかったのは意外だった。
涙のかわりに、文章に挿入した小さな風景写真を軽くからかわれた。

かないずむと SCR

2008 年 7 月 26 日。 堀口さんの独立 2 周年記念講演会が行なわれた。
ゲストがいる・・堀口さんのブログに度々登場している金井豊さんだった。
堀口さんは金井さんのことをいつもメンターと呼んでいる。
カリスマ美容師で経営者でメンター。
メンター？ 先生のようなものか？ 自分にもメンターが欲しいとは感じない。教師は苦手だ。
むしろ自分も女性からメンターメンター言われてみたいと思った。
これはいい。メンターになりたい。
本に書いてあるような格言とか法則とかをいっぱい知っていればなれるかな？

会場に入ると、隅のほうに金井さんが一人で座っていらっしゃった。
会釈したら気づいて返してくれた。
暑い日だったが、金井さんの周囲には涼しい風が流れているように感じた。
金井さんの語りは面白かった。メンターになるのは簡単じゃなさそうだな、と思った。

さて、この講演会の直前に凄まじいページ数の資料が届いている。堀口さんと金井さんが日々やり取りしたメールが記録されていた。「かないずむ」というタイトルだ。
金井さんの教えが素晴らしい・・が、この女性からのメールを読む側がいいと感じた。
こういうメールを貰えるようになるには、どうすればいいのだろう・・

2008 年 11 月下旬。
堀口さんと金井さんが始めた会員制サイト「かないずむシークレットルーム(SCR)」に参加する。
テーマは「パーソナルブランディング」。10 ヶ月間だけ存在する。
メンバーは、プロコーチや事業をされている方が多い。
ブログやホームページを持っている方も多い。
また場違いなところに来てしまった。小学生と大学生くらい、差があるように感じる。
まずいな・・これは。 それでも食らいついていくしか無い。
課題で出されたブログをやり始めた。記事にコメントし、課題に取り組む。そんな毎日になった。仕事の休憩時間は外出をやめて PCを開くようになった。休日も出掛けなくなった。
SCR中心の生活になり、SCRで日々のリズムが形成された。

「ひとみずむ」

堀口さんのあるクライアントさんが「かないずむ」を読み、「私も書こう！ 」と思った。
「金井さんが堀口さんで堀口さんが私」 タイトルは「ひとみずむ」とした。
書き終わると「ひとみずむ」のあとに「1」とつけた。 ほかにも書いてくれる人がいると彼女は信じた。
そして、すぐに「2」を書きますという人が現れた。
結局は 14 人も集まった。集まってひとつの作品となった。 2009 年 2 月 1 日「ひとみずむ」は公開された。

「ひとみずむ 1」は瑞々しく爽やかな話だった。「ひとみずむ 2」は淡々と語られていた。
ぼくは一話読むごとに感想を送った。そうしたくなるのだ。
結局は、14 のストーリー全部に感想を送った。
すると堀口さんは、ぼくの感想をひとつに纏めて公開してくれた。

「なんであんなに感想がうまいのですか？ 」
繰り返し堀口さんにそう訊かれたが、いくら考えても分からなかった。

ひとみずむを書いた方から、次々と感謝のメールがきた。それにまた返信する。
そのやり取りを見た堀口さんは、涙が出てきたらしい。ブログにそう書いてあった。
お？ 泣いてるぞ？？ 密かにガッツポーズしたのは言うまでもない。
「ひとみずむ」を読んで、コーチングのイメージが変わってきた。

質問に答えて気づきを得るというのは、ほんの一面でしかないような気がした。
「ひとみずむ」の感想に「ぼくもコーチングを受けようと思います」と書いておいた。
これが幸いした。いや、幸いしたのは全部に感想を書いたことだろう。
堀口さんから「私で良ければお受けできます」というメールが届いた。
いきなり堀口さんでは敷居が高いように感じていたが、思い切ってお願いすることにした。

ちょうどその頃「セミナーをやってください」という課題がSCRで出されていた。
遠い世界の話に聞こえた。それはエラい人のやることだ。ぼくには何も話せることがない。
しかし課題なので、一応前向きに取り組んでおくかな。
そんな気分で、セミナーをテーマとした単発コーチングも申し込んだ。

セミナーをやれって? ご冗談でしょ。

「いつぐらいにやろうと考えていますか？ 」
「そうですね。来年の 5 月あたりとか・・」
「えー？ そんな先・・。今年の 5 月にしましょうよ、いい季節です」
「えええええもうすぐじゃないですかあ！！！！！むりむりむりむり絶対むり！！！！！」
「大丈夫、できますよ」
「・・・・」
もう一回「できません」とは言いたくなかった。
頭を抱え目を閉じた。すべての血液が、脳に集まって来た。
何も考えていない。頭の中が真っ白だった。いや真っ赤だったかも知れない。
しばらく固まっていた。やがて、どこかで何かが動いた。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・や・り・ま・す・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「そうですか、ああよかった♪」
堀口さんの声が微笑んでいる。 やると言った自分がカッコいいと、少しだけ思った。

それにしても有り得ない。何でやると言ったんだろう。有り得ない。たいへんなことになった。
セッション終了。それから、もの凄い勢いで部屋を片付け始めた。
十分きれいにしていたが・・もっともっと、徹底的にきれいにしなくては！ と感じていた。
これから突っ走るんだから。

奥さんに経緯を話し、協力をお願いした。
「それじゃあ、そのセミナーへ行くからね」
こちらを睨んだ。
「あたしが行かなくて誰が行くのよ」

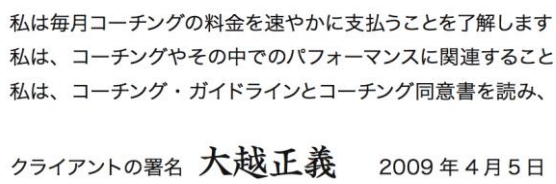
すぐに 90 日コーチングも始まる。 やっと自分にもその時期が来たんだ、と思った。

全力疾走の日々

2009 年 4 月。いよいよ 90 日コーチングの初日を迎えた。

「おはようございます。宜しくお願いします」
「もうー、爆笑！！！ですよー」
「は？ 」
「この書類！！」
事前に質問が出されていて、その回答を提出してあった。
「これは爆笑ですよー！！！ひーおかしいー」
なんだ？？？

「特にこれ！！！いちばん最後のこれ！！！」
あ・・署名だけ楷書体にして、少し手書き風にしていた。



「だいたい、PDFにして出した人なんて今までいませんよ？？？ あーおかしいーーー」
「ダサイかなと思ったんですけど」
「ははははははははははははは」
「いちおう、署名っぽくしようかと」
「ひいいいいいいいいいいーーーー」
すでにコーチングは始まっているのか？ これはいったい？？？？？
「あーおかしかった・・・・・・・くっくっくっ」
きょうは笑って終わるのか？

何度も「これは笑いを取ろうとしてやったのでしょう？ 」と訊かれた。
「真面目です」と答えるたびに笑われる。

数回のセッションは、セミナーのことをテーマとした。 アドバイスもたっぷり頂いた。心強い。
セッションを繰り返すたびに腹は固まった。
逃げ出したい気持ちは消えていき、「何が出来るのか？」だけ考えるようになっていった。
無我夢中で走った。できることは、なんでもやった。日ごとにスピードが増した。
気がつけば、目の前にその日が来ていた。 もうそこへ辿り着けるのは間違いない。
静かな気持ちで当日を迎えた。

ハイライトブック事件

2009年7月。 堀口さんの独立3周年記念講演会が行なわれる。
「ひとみずむ」のハイライト部分を小冊子にして来場者に配布することになり、
ぼくはレイアウトと印刷を任された。

堀口さんはロンドンへ行っていた。
連絡のメールには、毎回のように「申し訳ないです」と書いてあった。

堀口さんの幼馴染みである、デザイナーの青根さんと打ち合わせを行った。
「堀口は、ほんとにこういうの好きですよねー」
メッセージカードの装飾を見ながら、にやりと笑う。
「しょーもないなあ。まあ、あいつのやりたいようにしてやりましょう・・笑」
それから堀口さんのエピソードを幾つかお聞きした。
ロンドンでクシャミしてるかな？

カードは青根さんがきっちり仕上げてくれた。 あとはぼくのハイライトブックだ。
「大越さんの好きにやってください」 ある日のメールに、この言葉を見つけた。
じゃ、好きにやります。

写真をバンバン使った。それをページいっぱいに大きく引き伸ばし、文字は写真の中に並べた。
好き放題に作った・・が、印刷に時間がかかり、講演会に間に合わなくなってしまった。

「遅れます」と堀口さんにメールした。刻々と時間が過ぎていく。
4 時 45 分になった。講演会は 5 時までだ。あと 1 時間はかかるだろう。
まずい。まず過ぎる。
堀口さんにとって前代未聞のことだろう。お客様へお渡しする物が届いていないなんて・・
そのとき、はっと気がついた。
取り敢えず、今出来上がっている分だけ持って行って、 懇親会へ出ない人に渡そう。
残りは懇親会には間に合うだろう。
タクシーに飛び乗った。会社のある両国から講演会場のある銀座まで 15 分。ギリギリだった。
しかし銀座は歩行者天国になっていた。天を呪う。タクシーが進まない。
会場へ到着したのは 5 時 30 分頃だった。誰もいなかった。
堀口さんへ電話したが通じない。 「終わりだ・・」 堀口さんの晴れの日を汚してしまった。
人混みの中を、段ボール箱を抱えてとぼとぼと歩いた。
汗が吹き出る。擦れ違う人がみな、こちらをじろりと見た。

携帯が鳴った。堀口さんからだった。何て言おうか？ 頭が動かない。とにかく謝らなければ。
「どうですか？ みんな楽しみに待ってますよ。懇親会に間に合いそうですかね？ 」
軽やかで明るい声だった。風鈴のように聴こえた。
「必ず間に合わせます！！！！！！！！！！」
もし堀口さんが男性だったら惚れているだろう。
・・・あれ？ えーと・・いや、そんなことはどうでもいい。
会社へ跳び帰り、残りの作業に取り掛かった。新しい力が次々に湧いてきた。
8 時頃に出来上がった。エアコンもパソコンも照明もつけっぱなしで会社を飛び出す。
車をぶっ飛ばした。1 秒でも早く届けるのだ。
懇親会場のドアを開けた。 「堀口さーん、大越さんが来ましたよ」という声が聴こえる。
誰が誰だか分からない。顔を見れなかった。
次の瞬間、大きな拍手が起こった。いっぱいの笑顔と歓声に迎えられていた。

いま何が起こっているのだろう？
「遅れやがって」という空気は一握りもない。忘れられていたわけでもない。
楽しみにみんなで待っていた。そうとしか考えられない。
ハイライトブックを見た人たちが泣いている。あちらでも、こちらでも。

堀口さんも泣いたと、誰かが教えてくれた。
やったぁ！ と喜びたい場面かな・・？ だけど、ただひたすら「ありがたい」と感じていた。

それは違います。

「オレっていいコーチになれるんじゃないかな？」次第にそう考えるようになった。
タイミングよく、セミナー会社からもコーチ養成クラスのお誘いが来た。
「これは、いま流行りのシンクロとゆーやつに違いない」そう確信してすぐに申し込んだ。
クライアントさんが殺到し、カリスマコーチとして輝かしい存在となった自分を想像した。
スーツをびしっと着込み、ネクタイをして、ななめ 45 度の角度で白い歯を見せてにこやかに笑うプロフィール写真・・いや、なんか違うな。
花柄のシャツに麻のパンツで草原に立ち、風の中で遠くを見ている自分・・これも違う。
そんなことばかり考えてニヤニヤしているうちに、セッションの日を迎えた。

「それは違いますね」
あっさり。
「コーチの大越さん・・なんかちがーう」

こんなにきっぱり「ちがう」と言われたのは、このときだけだ。
でもやりたいんです、と返す気は起こらなかった。あーやっぱり・・と思った。

「作品をつくるというイメージなんですよねぇ、私には」
おお！そうか！
なんかカッコいい！

「大越さんは一人で山に篭ってください。エベレストを登ってほしいですね。
草原に降りてくるのは、ときどきでいいんじゃないですか？ 」
「そうですか・・。明日もみんなで集まるんですけど」
「ご近所付き合いが大変ですねぇー」
あわわ。
そしてぼくは、あっという間にコーチになるという考えを忘れた。
セミナー会社からも「既に満席です」との連絡が来た。これもいま流行りのシンクロか・・

ウォーリーを探せ！

SCRの人たちに不満を感じていた。
「記事にコメントしてください」と金井さんは 仰ってるじゃないか。なぜコメントしない？
課題をやらない？　堀口さんと金井さんに申し訳ない。イラついた。

「コメントしないなんて考えられません。おはようと言われて返事しないようなもんです。
それに凄いです、かっこいいです、っていうコメントばかりで中身が無い。イライラします」
喋りながら、また腹が立ってきた。

「そうですねー」
堀口さんはそう言いながらもケラケラ笑っている。

「自分軸が出来てきたら、他人との摩擦が生じやすいと聞いたことがあります。
今はそんな感じかも知れません」
「はい」
「そういうときは、相手軸も尊重したらいいそうです。 でも具体的にどうすればいいのかが分からないですね・・」
「『相手を尊重する』のと『相手軸を尊重する』のって違いますか？ 一緒なんですか？ 」
「違う気がします。相手の軸がわかれば尊重できそうです」
「あぁーなるほど」
「でも相手を尊重するっていうと、なんか傲慢な気が・・ そう考えること自体が、どこか相手を否定しているような」
「あああ、なんかわかる！ それって、どういうことなんでしょうね」
「・・・自分自身が、自分の軸で人に接することだけを心掛ければいいと思います」
「ほぉ」
「ん？ 自分の軸で接してる積りでも、まわりの人が苦しそうに見えることがあります。 やっぱりどこか、否定がある」
「んん、ありそうですね。どこかな・・」
しばし考えた。

「行動自体に『あなたは出来てないよ』というメッセージを含んでいるようです。
バレないように、小さく小さくして、こっそ りと少しずつ」
「うわーやだなぁーそれ。なんでそういうことをするんでしょうね 」
「・・他人を低く見ることで、自分が少しでも高い位置にいるように感じたいからですねぇ」
「うわぁー」

それから、行動や言葉の裏にこっそりと隠してある「否定好きな分身」を発見していった。
あそこにも、ここにも。
堀口さんはうわーうわー言うくせに、なんだか楽しそうだった。
「ウォーリーを探せ！ のようですね♪」

内側の変化

8 月ごろから、あれやる、これやると言いながら進まない日々が続くようになった。
セッションの時は「やります」と言うし出来る気がするのだが、どうにも進まない。
堀口さんは別に気にしている様子はない。
「ああ、そう言えばそんなこと言ってましたっけね」いつもこんな調子だった。
なんだかぱっとしないなあ。あれこれと取り掛かるものの、どれも途中で止まってしまう。

そんなある日、堀口さんから食事のお誘いを受けた。
「金井さんに、たまには食事誘ってくださいって言ったら、大越さんも誘いましょうって言うのでどうでしょうか」
このメールには、いつものような口元に笑みが浮かんでいる感じがなかった。
お邪魔ではないか？ 堀口さんは金井さんと二人で食事したいのではないか？
意外なことに、まだお二人は数えるほどしか食事をしたことが無いのだ。
行きにくいなあ。しかしせっかくのお誘いを断りたくない。
なるべく明るい感じで返答した。
「もし金井さんのご都合がつかなければ、ぼくがみんなを誘います！！」
そうしたら「それはお断りします」と返事が来た。
ぐさっと来た・・10 分ほどへこんだ。くそっゼッタイ行ってやる！！

予想に反して、当日の堀口さんはご機嫌だった。
お二人の始めたコミュニティ(SCR)が、終わりに近づいている。
「SCR では、もう話すことは全て話したよ。
みんな、堀口さんが独立する直前の段階には来てるよね？ じゃあ成功だね」
お二人は、こう語り合っている。SCR はお二人に取ってもチャレンジだったのかなと感じた。

金井さんは酔って足元がフラフラだ。 堀口さんは、金井さんにさんざん突っ込まれている。
「あまり喋らないですね」堀口さんがそう話しかけてきた。
解散して一人になった途端、急に酔いが回ってきた。カフェへ入ってへたり込んだ。

その頃、セッション中に微かな違和感を覚えることがあった。
堀口さんが金井さんを引き合いに出し「こう言ってました」「こうしてるみたいですよ」と話すのが微妙に引っ掛かる。以前は何とも思わなかった。
いやな違和感ではない・・むしろ胸がつんとするような感じがある。
たぶん嫉妬ではないな、と思った。それらしき影は無い。
そして不思議と「もっと頑張ろう。力を出そう」という気持ちがわき起こった。

セッションを繰り返しながら、次第にあれこれやりたいという話をしなくなっていった。
目の前にあるものにまず全力でぶつかる。それでいいや、という気持ちになってきた。
いま目の前にあるのは、この「ひとみずむ」の執筆だ。
セッションのテーマは毎回「ひとみずむ」になった。

「最近ずっと、話すのはひとみずむのことですね」
堀口さんはクスクス笑った。
「でも・・ありがとうございます」

まずひとみずむをやる。それが終わってから次だ。

ひとみずむ執筆

目覚ましい業績の向上とか、ドラマチックな自己の変容とか、そういうことを書きたかった。
堀口さんのブログで、他のクライアントさんのそのような活躍をよく読んでいた。
しかし劇的な場面は思い浮かばなかった。書くことが何もない・・
まだ「ひとみずむ」を書くのは早いんじゃないだろうか？
繰り返しそう考えては、慌ててそれを打ち消した。

「わたし年賀状出して来るね」
「あ、俺のも一緒に出して来て」
渡した年賀状を奥さんはじっと見た。
「『2009 年もいい年でした』は『おかげさまで』を入れたらどう？ 」
少しむっとした。
「・・なに、また怒った？ あたしはそれがいいと思うから言ったわけ」
「なかなか年賀状を書こうとしなかったのに、今になって偉そうなことを言うんだもん」
「ああそうですか。来年からは全部あたしが書きますから」
そんなの嫌だよ。
「一緒に書きたいです」
「あ、そう。わかった」

ここまで書いて手が止まってしまった。またムカムカしてきた。
2010 年 1 月下旬。「ひとみずむ」を書き始めてから 4 ヶ月が経過している。

冷蔵庫を開け、牛乳をひとくち飲んだ。
奥さんはリビングで横になっている。テレビがつきっぱなしだ。眠っているのかも知れない。
押入れから布団を出して敷いた。やはり眠っている。布団へ行くよう促した。寝ぼけている。
少しずつ気持ちに温かさが戻ってきた。 いつもありがとう。 ちょっぴりそう思った。

このとき、変化が「そこ」じゃないことに気がついた。

気分の切り替えが早くなっている。
優しい気持ちがすぐに戻ってくる。

驚くような業績の向上も、涙なしには読めない劇的な変化も無い。
しかし「それ」以外が「ある」のではないだろうか。

掃除が楽しい。食器を洗うのが楽しい。道で嫌な人と出会わない。
ジョークを言える。友人がどんどん増える。女性にモテる。街で熱い視線を感じる。笑
感情に流されない。我慢しない。人の評価を気にしない。先のことを案じない。
感じたことをそのまま伝えられる。会話が楽しい。「大先生！」なんて呼ばれる。
受け止め方を変えることができるし、予想外の出来事も受け入れられる。
あらゆることに意味を見つけられるし、見つけるスピードも早くなった。
メールが素っ気ない。悪い、ずるい、ブラックだと褒められる。「いい人」を意識しない。
思考も行動も、すっかりシンプルになった。そして笑いが絶えない。

変化は「ここ」にある。
星々が動くんじゃなくて大地が動いているのだ。
やっと見つけた。
自分がコーチングで何を得たかったのかも分かった。

奥さんに布団を掛け、部屋の灯りを消す。
カーテンごしに月が見えた。

ぼくのひとみずむ

堀口さんが開催するものにはなるべく参加してきた。セミナー、花火大会、ファッションコンサル、パーティ。
いつでも堀口さんは変わらない。
次第にそれがどんな音階なのか分かってきた。音感がついたというべきか。
浅い言葉、偽りのある言葉は、まるで堀口さんの耳には聴こえていないかのように感じる。
もっと奥の、ぼくの心の中心へ話しかけて来るし、そこからの声だけ聴いている。
すると何枚も布団を重ねて隠れている心の中の本当の自分が、堀口さんの応対に出て来ることになる。
彼じゃないと相手にならないのだから仕方ない。そして次第に彼は社交的になってきた。もうパジャマは着ていない。
これに尽きるような気がする。すべての変化は、ここから来ているように感じる。

さて、編集者の前川さんがここまで書いた分を読んでくれた。
「冒頭のハイジの前フリが壮大なので、そのウケがあるといいかな」
嬉しい。厳しい批判や鋭い感想が欲しかった。いままでは良い評価ばかり望んで来た。
確かにハイジの話には何かあるんじゃないか、と感じた。

ハイジのおじいさんの言葉が深い。でも、そこには惹かれなかった。
ハイジとクララが気になる・・気になるが、その理由がどうにも分からない。
そのまま数日が経過した。

ある日の夜。寝る前に、奥さんの背中をさすっていた。ほぼ日課になっている。
さすっている自分も、どこか癒されていると感じていた。
「奥さんの背中からこの手の平へ、何かとても大切なものを受け取っている 」
そう考えてみた。そうしたらハイジがいた。

堀口さんはハイジだ。奥さんもハイジだ。
そしてハイジに自分の姿も重ねている。

ぼくはハイジになろうとしていた。
いつかなりたいんじゃなくて、いつでもハイジであろうとして来た。
クララなのに、同時にハイジであろうともしてきた。
そして堀口さんは、ハイジなのにクララ役も果たして来てくれた。

よくわかる。
ぼくはハイジであるときに、とてもエネルギーが生まれる。
「可哀想なクララ」のままでは力が出ないのだ。
ハイジはクララでありクララはハイジでもある。だからクララは歩いたのだ。

堀口さんは金井さんにとってもハイジだ。間違いない。
ぼくはSCRでもハイジになろうとした。だから食事に誘われた。
「ひとみずむ」のみんなもハイジだし、これを読んでくれる人たちもハイジだ。

ひとりじゃ、ハイジにもクララにもなれない。
ただひたすら夢中で何かをしたとき、誰かさんが笑ったり泣いたりしてくれる。
そのとき二人はお互いにクララでありハイジでもあるんだと思う。

またやられた！ こんな展開になるとは思わなかった。ハイジに自分を見ていたとは・・。
PCの前でニヤリとしている堀口さんの姿が思い浮かぶ。

つまりは、ニヤリとさせようとして「ひとみずむ」に取り組んできた自分がそこにいる。

この方と関わって、予想通りの展開になったことなんかひとつもない。
だから先を思案するのはとっくに諦めた。無駄なんだもの。
森の木々のように、根を張ってしなやかに風を受け止めるしかなくなる。

日に日に新しい発見がある。そのたびに「ひとみずむ」を書き直す。
キリがないので、ここで一度終わりにしたいと思う。

これがぼくの「ひとみずむ」だ。
堀口さんのすべてが「問い」であり、ぼくのすべてが「返答」なのだろう。

明日もまた新しい「ひとみずむ」が生まれる。

おわりに

ぼくのブログは Letters というタイトルで、カモメが飛んでいる画像を使用しています。
堀口さんがぼくのブログの印象を語ってくれたことがあります。

「なんだか、このカモメが手紙を運んで来る感じなんですよね。
ふと窓を見ると、カモメがちょこんといて、口に手紙をくわえていて」

堀口さん、いつもありがとうございます。

そして今晩も隣の部屋で寝ている奥さんも・・ありがとう。

最後までお読みくださったことを感謝致します。
やっぱり、みなさんはハイジです。クララはここまで歩けました。
ご自分の中のハイジを可愛がってあげてください。笑

ありがとうございました。